

## 宝立町における葉タバコ生産

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/41392">http://hdl.handle.net/2297/41392</a>

## 5. 宝立町における葉タバコ生産

湯川 美奈子

1. はじめに
2. 葉タバコ生産の概要
3. 宝立町における葉タバコ生産
4. 考察
5. おわりに

### 1. はじめに

葉タバコ生産は以前盛んだったが、今ではほとんど行われていないという話を聞いた。聞き取り調査中も、驚くような確率で以前葉タバコを生産していたという人に出会った。こんなに多くの人が携わっていたのに、どうして衰退していったのか興味を持った。

本章では、珠洲市全体における葉タバコ生産の傾向と、宝立町における葉タバコ生産を比較しながら、宝立町の傾向を考えたい。

### 2. 葉タバコ生産の概要

葉タバコ生産の傾向を、珠洲市と宝立町とで分けて考えたい。珠洲市における傾向は、『珠洲市史 第4巻』（1979）を参考にした。宝立町における傾向は、農林業センサスのデータを基に、珠洲市全体と比較する形で述べる。

#### 2.1 珠洲市における葉タバコ生産

珠洲市における葉タバコ生産は、1953（昭和28）年頃から栽培の気運が高まった。1954（昭和29）年10月6日には葉タバコの栽培が許可され、珠洲市の新しい農業の方向性が見出された。その後、ほぼ珠洲市全域で栽培された。

品種は主に二種類栽培されていた。機械で乾燥させる、大規模経営が可能な第二黄色種と、自然乾燥でもよく、小規模経営でも可能な第五在来種白遠州である。

それまで桑園として利用されてきた地が、葉タバコ栽培に利用された。これは、養蚕と葉タバコ栽培の両立が難しいためである。葉タバコから出るニコチンが風に運ばれ、周辺の桑園で桑にも蚕にも悪影響になる。また、葉タバコの連作を避けるため、タバコ畑は比較的広い面積を必要とする。さらに、労働力の面でも葉タバコ栽培と養蚕は競合した。葉タバコ栽培では、大量の労力を4月の植え付け時と、6、7月の収穫乾燥期間に必要とする。

『珠洲市史』によると、1965（昭和40）年くらいから、葉タバコの作付面積、耕作者数ともに珠洲市全体で減少する（1979:443）。しかし生産量ではほとんど変化が見られず、むしろ単位面積当たりの収穫は増大している。この頃に単価の2倍近い引き上げもあり、一定規模以上の生産を行う農家は、専業化していった。

## 2.2 宝立町における葉タバコ生産

宝立町における葉タバコ栽培はどのような傾向にあったのか。表1は、農林業センサスのデータを基に、筆者が作成したものである。

表1 宝立町における葉タバコ生産戸数と耕作面積

	葉タバコ生産戸数	葉タバコ耕作面積	総農家戸数
1960（昭和35）年	81戸	18.3ha	902戸
1970（昭和45）年	149戸	58ha	963戸
1985（昭和60）年	46戸	37ha	753戸

（出所：1960年、1970年、1985年「農林業センサス」から筆者作成）

1960（昭和35）年の段階で宝立町の葉タバコ生産戸数は、81戸であった。珠洲市で葉タバコ栽培が認可されたのが、1954（昭和29）年であるから、わずか6年の間に約80戸もの生産者が加わったことになる。それでも、総農家数に占める葉タバコ生産戸数は約8%であり、1戸当たりの耕作面積も約22aと、まだ普及し始めた段階と言える。1970（昭和45）年には、一気に葉タバコの生産戸数が増加する。全体の農家数も増加しているが、葉タバコ生産戸数の伸び率の方が大きい。総農家戸数に占める葉タバコ生産戸数は約15%にまで増加し、1戸当たりの耕作面積も約38aにまで増加している。一方で、1985（昭和60）年になると、葉タバコ生産戸数は激減する。総農家戸数に占める葉タバコ生産戸数は、約6%にまで落ち込む。しかし、1戸当たりの葉タバコ耕作面積は80aにまで増加している。これは、葉タバコ生産者が限定的になり、大規模な生産者は専業化していったためと考えられる。専業化の傾向は、珠洲市全体にも見られた傾向である。生産戸

数の減少の時期は、珠洲市全体の傾向よりも数年遅れているようだ。珠洲市全体では、1965（昭和40）年くらいから葉タバコ生産者数、耕作面積ともに減少する傾向があったが、宝立町では少なくとも1970（昭和45）年まではむしろ増加の傾向がある。1970（昭和45）年以降は減少傾向を示しているが、珠洲市全体の傾向よりも数年遅れて、農家戸数が推移しているようだ。

### 3. 宝立町における葉タバコ生産

具体的に、聞き取り調査で得たことを項目ごとに述べる。

#### 3.1 宝立町でのタバコ生産の始まり

珠洲市にタバコ生産が導入され、宝立町にも生産農家が増えた。宝立町ではそれまで塩田が盛んであったが、タバコ生産の人気から移行していった人も多かったようである。

##### Y氏（中鶴島、男性、80歳代）

昭和29（1954）年に珠洲市が合併した。当時の岡本市長が、昭和30（1955）年にタバコ生産を導入した。地域の特産が何もなかったため、市長が導入した案だった。3、4年で広まった。当時は仕事がなかったので飛びついたというもある。父は体が悪くて、自分が主体となって生産をした。

##### T氏（中鶴島、女性、70歳代）

タバコ生産の前は塩田が流行していた。塩もタバコと同様に専売会社だったが、自由販売になり、競争的になった。塩田をやめて、タバコ生産に移行した。タバコなら専売会社が買い取ってくれると思った。

養蚕をしていた人もいたが、タバコの乾燥の際の煙が蚕に毒で、徐々に数は減っていった。

##### Y氏（宗玄、男性、60歳代）

タバコ生産を始めたのは、塩田をやめてからである。塩田をやめたのは昭和28（1953）年頃で、ちょうど朝鮮戦争の頃だった。昭和29（1954）年には、専売公社の許可を珠洲市の生産組合が受け、昭和30（1955）年から生産が始まった。タバコ生産は、現金収入を得るために始めた。米には面積によって収入に限界があるが、タバコなら質が良いものを作れば面積は関係ない。

当初は養蚕農家付近での、タバコ栽培の農薬が懸念され、葉タバコの耕作地は限定されていた。しかし昭和35（1960）年には一斉にタバコ栽培に切り替えられた。自分の家も耕作面積をこの頃に倍にした。

### 3.2 タバコ生産が中心だった子供時代

タバコ生産は家族で担っていた。父母の代から生産をしていた家は、子供の時から生産を手伝っていた。

#### Y氏（宗玄、男性、60歳代）

葉タバコ生産は家族の協力なしではやっていけない。最盛期は家族5人で作業をしていた。収穫で等級を見極めるのが父と母の仕事だった。よく生産の仕方、両親が喧嘩をしていたのを覚えている。力仕事などは男性がしたこともあったが、その他は特に区別なく、女性も同じように働いた。

#### T氏（中鶴島、女性、70歳代）

子供も土曜日や日曜日は作業を手伝った。平日も、学校から帰ると作業を手伝わされた。勉強なんかいいから作業を手伝えとよく言われた。最盛期には家族5人と、別に5人雇って作業をした。乾燥場は6段あり、女性は背が低いので、上の段へ持ち上げる作業は男性がした。他は特に男女の差なく働いた。今でも娘は、タバコ畑を見ると手伝わされたことを思いだし、気分が悪くなるという。

### 3.3 タバコ生産の流れ

タバコ生産はほぼ1年を通じて作業が行われる。月ごとに主な作業を述べる。なお、Y氏（宗玄、男性、60歳代）の話に基づいた。

- 3月 温床作りをする。最初は電熱線を利用したが、のちに堆肥による発酵熱で育苗するようになった。10日頃に種を播く。種を播いたら仮植床を作成する。20日頃に仮植をする。畑に肥料を攪拌し、畝あげをする。
- 4月 10日前後に、畑へ移植する。作付後に灌水し、活着するよう肥料を施す。また、霜よけや根切りを行う。
- 5月 初旬に追加で肥料を施す。中旬には一回目の培土をする。
- 6月 下旬から脇芽を除去する。この作業は、8月中旬に収穫が終了するまで続く。
- 7月 3日頃までに花蕾を見て摘む。この段階で成長の悪い所には、尿素を葉面に散布し、葉の一律化を図る。初旬から第一回目の収穫を行う。下葉の方から黄変し始めるので、黄色くなる前に収穫を始める。収穫したら、葉を一枚一枚交互に並べ、60枚を1本としたものを、一度に乾燥ささせる。その後に貯蔵する。
- 8月 下旬は寒暖の差が激しく、葉が病気になりやすいため注意する。15日には収穫も終わる。

10月 下旬から葉を等級別に選別して出荷する。梱包はナイロンの袋に葉が湿らないように入れる（写真1）。

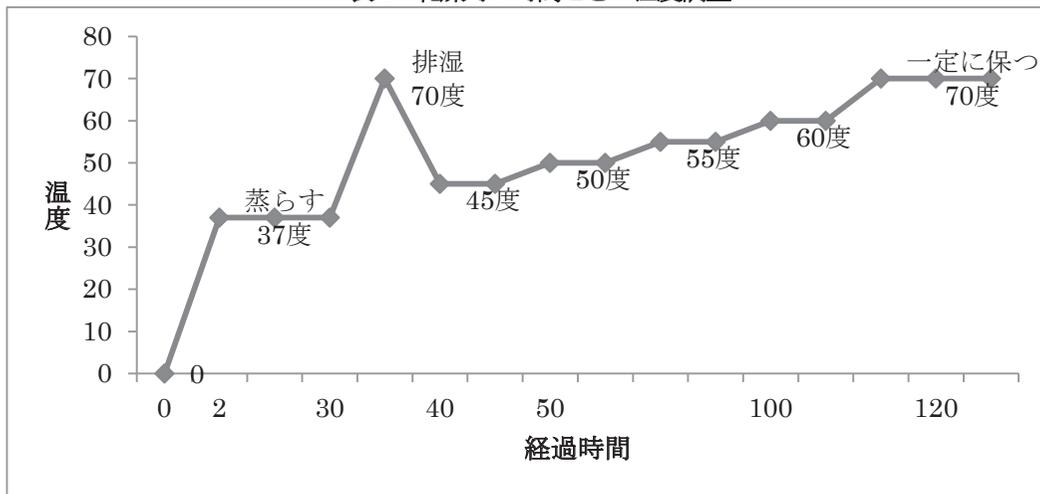
冬季 堆肥作りや畑の後片付けを行う。蔵人として酒屋に出稼ぎに行った人も多い。

年間を通して一番の重労働は、葉を乾燥させる作業である。

昭和40（1965）年頃までは、手作業で一枚一枚縄に葉を吊るして乾燥させていた。個人の乾燥場を持つ人もいたが、共同の乾燥場を使用する人もいた。タバコ生産を導入した当初は、失敗したら怖いので、試しにという形で共同乾燥場を造った。近所で誰かが中心に建て、使う人は使用料を支払って使った。燃料も技術の進歩とともに変化した。最初は薪だったが、その後亜炭、重油、灯油を使用した。重油は煙突から煙がうまく出ないと、中で蒸れてしまうという欠点があった。乾燥作業は、温度を一定に保つために徹夜をして行った。37度で1日蒸し、その後の4日間は100時間乾燥し続ける。この間にも5度刻みで温度を上げていく。5日目に70度で完成である（図1）。乾燥中は1時間か2時間に一度は温度を記録して、交替で眠る。

現在は機械化により、コンテナを使用する。コンテナは、金網に葉を積み重ね、ファンで風を送り乾燥させる仕組みである（写真2、写真3）。

表1 乾燥時の時間ごとの温度調整



(出所：Y氏のメモより筆者作成)



写真1 梱包された葉タバコ  
(2014年 筆者撮影)



写真2 コンテナ  
(2014年 筆者撮影)



写真3 コンテナ内部 (2014年、筆者撮影)

### 3.4 生産の工夫

葉の出来によって値段が変わってくるタバコは、栽培の際に様々な工夫がなされた。

**Y氏 (宗玄、男性、60歳代)**

肥料を作る際には、一本当たり何グラムかまで計算をして、調合した。牛糞や米ぬか、芋づる、もみ殻、下肥、おがくずなどを混ぜた。有機質の窒素濃度など、肥料計算が出来なければ、

堆肥は出来ない。窒素 55%、リン酸 3%、カリ 3%が普通で、これを高めに設定して、その分化学肥料の窒素を減らした。去年の土を参考に、ここは堆肥を多めに、ここは少なめに調整した。

雨の具合で尿素を葉の両面に塗った。葉の色がよく出るようになる。

土寄せは、普通は鍬で行うが、鉄板で葉を痛めるからよくないと思い、耕運機で引っ張った後にスコップでした。耕運機だけでは根本までいかない。他人は2回でも、自分は3回した。根に肥料をやらないと意味がない。

割りばしでは痛むため、一本一本輪島塗の箸で植えた。できるだけ葉を痛めないよう、隣の葉とは互い違いになるようにずらして植えた。1センチでも葉がずれたらおしまい、葉と葉の間隔は広い方がいい。機械の幅は最小限の45センチにして作業していたが、作業形態に合わせて調整する必要がある。

葉の消毒は朝にすると、葉がシャキッとしているため傷んでしまう。そこで日中の晴れた日に行った。

葉を乾燥させる際には、乾燥場のダイヤル式の温度計では、乾燥場内の場所によって差が出てしまう。そこで温度計を二つ並べて、その差で温度を計った。乾燥場内は上と下で温度が違っているので、上に厚い葉、下に薄い葉と区別した。

### 3.5 高収入だが出費も大きい生産

葉タバコを生産する上での魅力は、やはりその収入である。高額な現金収入が見込めた。しかしその一方で、設備投資や人件費への出費も大きかったようだ。

#### T氏（中鶴島、女性、70歳代）

タバコの等級によって変わるが、一反あたり20万円から50万円の値にはなった。自分は一反あたり37万円にはなるタバコを作っていた。ただ、経費や人件費はそれなりにかかった。最盛期には人を雇い、泊まり込みで作業をしてもらった。耕運機からトラクターなど、新しい技術が開発されれば投資をした。それでも手元に何百万も残った。

#### Y氏（宗玄、男性、60歳代）

設備投資や人件費はやはり大きかった。全て人力でまかなっていた頃は、一反あたり80人は必要だった。機械を導入することで一反あたり50人にまで削減できたが、機械への投資は大きかった。耕運機は、当時の日当900人分という高額だった。しかしそれでも、収入は米を生産する場合の3倍は見込めた。一反あたりの収入は、当時の額で約4万から9万円だった。当時は聖徳太子の100円札が最高額の時代であるから、相当の高収入だった。

#### Y氏（中鶴島、男性、80歳代）

乾燥場は一つ造るのに 200 万から 300 万円はかかるが、乾燥機は JT から補助が出た。3 分の 1 は JT が補助してくれ、残りが個人持ちだった。5 年以内に払うというローンのようなものだった。燃料や肥料代に補助はなかった。一反あたり、一人 8 時間労働で 30 人は必要だった。人件費は他の作物栽培よりも高かったと思う。

### 3.6 タバコの等級

葉タバコ生産は高額な収入が見込めるが、生産に失敗すると収入に大きな差が生まれるのも特徴である。等級によって値段が大きく異なった。

#### Y 氏 (中鶴島、男性、80 歳代)

等級を決める際の、一包の大きさは 55 センチよりも小さく、約 30 キログラムである。A ランクと B ランクで一包 1 万 5 千円の差が出る。A ランクは 1 キログラム 2 千円、B ランクは 1 キログラム千円ちょっとだった。虫食いや湿り気で等級が下がってしまう。10 月末にまとまった収入が入るが、この時期になって C ランクばかりだと金にならず大変である。

#### Y 氏 (宗玄、男性、60 歳代)

昔は 8 ランクまであったが廃止され、その後 6 ランクになり、今は 4 ランクである。一つの等級の違いで、大きく値段が変わる。1 等と 2 等で 10 パーセントの差はある。3 等と 4 等になると、1 等の 3 分の 1 の値段にしかならない。

### 3.7 専売公社から JT へ

専売公社から JT へ移行したことにより、葉の等級決めが厳しくなったという話を多数聞いた。

#### T 氏 (中鶴島、女性、70 歳代)

自分で等級を考えて、分けて梱包するが、実際の等級を決めるのは JT の人である。専売公社時代にも専門の等級の鑑定士がいたが、JT になって等級付けが厳しくなった気がする。

しかし一方で、たばこ耕作組合で標本委員として、JT との値段交渉に参加した方もいる。たばこ耕作組合は、葉タバコ生産の向上と生産者の経済的社会的地位の向上を目的に、昭和 33 (1958) 年に設立された組合である。その中でも標本委員会は、JT が葉タバコを買い入れる際の基準を決定している。JT とたばこ耕作組合との共同で設置されている。標本委員は、タバコの品質に精通した人の中から選考される (JT の HP より)。

#### Y 氏 (中鶴島、男性、80 歳代)

平成 5、6 (1993、1994) 年から 5 年ほど標本委員として生産者の代表をしていた。たばこにランクをつける権利があった。JT と買い取りの交渉をし、駆け引きでランクをいじることがで

きた。一生懸命作ったのだから、気持ちを汲んでくれやと、生産者代表として交渉をした。

### 3.8 たばこ年金

農業者年金を指して、たばこ年金と言っている人が多いようだ。

農業者年金は、独立行政法人農業年金基金によって運用されている。農業者の老後の安定及び福祉の向上を目的に、設立された独立行政法人である。農業に携わる人ならば広く利用が出来る。積立式の年金制度で、加入者に左右されずに安定して受給できる。保険料は自由に選択でき、最低月 2 万円からである。また、ある一定の要件を満たせば保険料の国庫助成も受けられる（独立行政法人 農業者年金の HP より）。

#### T 氏（中鶴島、女性、70 歳代）

たばこ年金とは農業者年金のことをいう。入っていたが、たばこを辞めたら権利がなくなるので辞めた。掛けていたお金は解約時に少し返ってきた。

#### Y 氏（宗玄、男性、60 歳代）

たばこ年金とは農業者年金を指している。たばこ年金は他の年金と同じである。互助会のようなものだった。積みたてて、月に 5 万ほど貰ったがたいした額ではない。2 年か 3 年掛けても仕方がない。10 年以上耕作した人の権利で、10 アール以上の耕作地を持つ人など、制限もあった。

### 3.9 タバコ生産の衰退

タバコ生産をやめた時期は人それぞれであるが、生産をやめた人に与えられた、専売公社からの補助金も生産離れに影響を与えた。タバコ生産の収入の大きな要である、高品質な葉が取れなくなったことが、衰退の大きな原因のようだ。

#### A 氏（中鶴島、男性、70 歳代）

現金収入があるため、タバコ生産は人気だったが、徐々に下火になっていった。2 月に作業を開始して、9 月に収入がようやく入る。天候にも左右される。量産すると丁寧に作れないため、質が落ちて価格も安くなってしまふ。機械を導入するにも費用がかかる。採算が合わなくなっていった。若者は兼業を希望する人も多く、タバコ生産に一生をかけるのはハイリスクだった。

#### Y 氏（宗玄、男性、60 歳代）

有機肥料を牛馬から得ていたが、機械化によって牛馬自体が減少した。化学肥料では高品質のタバコは作れない。15 年で連作障害が生じ、生産地も戦後の開拓地へと移った。喫煙離れや、専売公社から JT への移行も影響した。機械化で量産になり、質が落ちた。低質では、よ

り賃金の安い外国産に対抗できない。

オリンピック以降は商業や工業が人気で、農業自体が下火だった。タバコの収入も横ばいになっていった。連作障害から必ず産地は移行すると見込んだ父が、早急にタバコ栽培から手をひいた。タバコ栽培に使用していた機械は、じゃがいもやなす、トマトなどのうね立てや土寄せに利用できたのでタバコ栽培はすっぱりと辞めた。また、母が入院し、同じ頃自分は教員になり、家族内で人手が足りなくなったこともある。

#### **T氏（中鶴島、女性、70歳代）**

生産者が少なくなってきた頃、タバコ生産をやめる人に専売公社が補助金を出すようになった。1反あたり、10万から20万円程の補助金が支給された。生産過剰と禁煙者増加によるものだった。自分も昭和57（1982）年頃に生産をやめ、30万程の補助金をもらった。タバコ生産は家族で作業をする必要があるが、子供が独立し、人手が足りなくなった。それでも道具はあるのでしばらくは生産していた。しかし、昼夜の仕事で体を壊し、採算も合わなくなり自然とやめた。

### **3.10 タバコ生産のその後**

聞き取りをする中で、宝立町で今でもタバコを生産している家は一軒しか見当たらなかった。多くの家では、タバコとは関係のない作物を育てたり、趣味に土地を利用していた。また、荒地になっている土地も多いと聞いた。

#### **Y氏（宗玄、男性、60歳代）**

葉タバコを生産する際に使用した機械を利用して、カボチャを生産した。しかし労力を使うため、少ししか作らなかった。1.5反ほどカボチャを作り、2万から3万円の収入を得た。

#### **Y氏（中鶴島、男性、80歳代）**

自分が以前使用していた乾燥場やタバコ畑を、娘婿に貸していて、今では娘婿がタバコを生産している。山の中の15反のタバコ畑を貸している。元々タバコ畑だった残りの6町は、専業農家に貸している。区画整理で山を開いたため、家から離れた所にタバコ畑があった。

#### **T氏（中鶴島、女性、70歳代）**

タバコ生産をやめてからは、荒地になった所が圧倒的に多い。自分は元々タバコ畑だった土地に、趣味で梅やブルーベリーを植えて今は楽しんでいる。

## **4. 考察**

聞き取りを基に、宝立町の葉タバコ生産の傾向をまとめるとともに、珠洲市全体及び珠洲市の

他地域との比較をしたい。

#### 4.1 宝立町における葉タバコ生産の傾向

宝立町における葉タバコ生産の傾向を、聞き取りを基に考える。

地域の特産品として、珠洲市が葉タバコ栽培を導入したのは1955（昭和30）年である。ほぼ同時期に、宝立町でも葉タバコの生産が始まっている。宝立町では、以前から塩田が盛んであった。実際の聞き取り調査でも、塩田を辞めてタバコ栽培に切り替えた人が多かった。市が葉タバコを導入してから3、4年で広まったというから、その間に塩田から切り替えたと考えられる。その頃の塩も専売公社だったが、生産が競争的になり、新たなタバコ産業に移行していったと考えられる。珠洲市全体では、葉タバコの広まりと同時に、養蚕の衰退が見られたが、宝立町でも同様の傾向が見られた。ただ、タバコの導入当初は、葉タバコの栽培は養蚕から毛嫌いされたようだ。それが1960（昭和35）年には、一斉にタバコ栽培に切り替えられた。葉タバコの農家戸数も、1960（昭和35）年には81戸に増加している。

タバコ生産の魅力は、現金収入と高い収入であった。品質によって値段が変わるタバコは、狭い面積でも十分な収入を得ることが可能だった。

その一方で、短所もあった。まずは、生産が1年がかりと長く、重労働であることだ。人手が必要なので、子供も生産を手伝い、家族全員で生産した。葉の質によって値段が変わるため、生産における工夫も試行錯誤であった。また、設備投資や人件費への出費が大きい。新しい技術が開発されれば投資をし、人手が足りなければ雇わなくてはならなかった。さらに、長所でもある狭い面積で高収入を得られる点は、逆に言えば品質が落ちれば安定した収入が見込めないことになる。こういった短所から、徐々に生産が衰退していったものと考えられる。また、タバコ生産を辞めた人に専売公社から補助金が出されるようになると、減少に拍車がかかった。

#### 4.2 他地域との比較

先に述べたように、宝立町での葉タバコの衰退は、珠洲市全体の傾向よりも、数年遅いようだ。これは、宝立町にタバコに代わる特産品がなかったことが原因ではないかと考える。現在のタバコ畑の利用は、趣味に利用したり、他人に貸したりと様々だが、荒地になった土地も多いと聞いた。タバコ畑の後に、カボチャなどの他の作物を植えた例もあったが、本格的に栽培をしていた例は少なかった。珠洲市三崎町における、過去の研究例（江崎 2010）を見ると、タバコ畑の跡地にカボチャやスイカを栽培している例が多い。特にカボチャは、能登カボチャとして大阪に出荷し人気だという。こういった代替え作物が宝立町ではあまり定着せず、設備投資の大きさから、引けに引けなくなり長期間生産を続けた人も多かったのではないだろうか。

## 5. おわりに

熱心に葉タバコの生産について語ってくださる方が多かった。子供時代の思い出は葉タバコだけ、と笑いながら語ってくださる方もいた。生産を辞めてからだいぶ経つはずなのに、詳細まで覚えている。それだけ、葉タバコの生産は家族全員で取り組み、子供時代を生産に費やしてきたのだらうと思う。そういった思いを、拙い文章ながらこの場に残せたら幸いである。導入されてから一気に火が付き、また激減していったものは、タバコの他にないのではないだろうか。

貴重な時間をこの調査のために費やして下さった宝立町の皆様に、心からお礼申し上げます。